

治療体験談

不登校生に対する自己回想療法(病棟内・内観療法)の治療経過

医療法人耕仁会札幌太田病院 内観療法課

○ 遠田真弓 小林順子 土生敦美 太田耕平

はじめに:近年、不登校、引きこもり、家庭内暴力等の症状で治療を必要とする患者が増加している。今回、不登校生に対し自己回想療法、家族療法を実践した。現在、治療の途中段階であるが経過を報告する。

症例紹介:A子高校2年。主訴:不登校、不安神経症、対人恐怖、過呼吸。A子小学6年時、父の借金が原因で両親離婚。その後母と2人暮らし。高校入学後、生徒会活動に積極的に参加したが、クラスに馴染めず、男子生徒から悪口、物を投げられるなどのいじめに遭った。何とか登校したが、高校2年時から頭痛や腹痛を訴え不登校気味となり、担任教師と相談し休学、留年となった。同年某メンタルクリニックを受診し投薬治療を約8ヵ月間継続した。休学中、放課後の生徒会活動には参加した。アルバイト先の上司の転勤、来年度からの復学が近づき不安定となり、希死念慮が出現し過呼吸で救急車を呼ぶことがあった。通院中のクリニックから入院、加療を勧められ、当院に入院となった。

治療経過:自己回想療法経過(治療第1期、入院1日目~8日目)入院直後の回想療法導入時、母との分離不安から「もう思い出したくない、家に帰りたい」と治療に拒否、抵抗した。不穏、多動が顕著のため保護室使用を余儀なくされた。その後、職員の動機付けにより徐々に回想開始。入院3日目には情緒の安定を認め隔離解除、自室回想療法に移行した。テーマ「父に対する自分」では、父への陰性感情が窺えたが、父により自分の存在があること、父は母が愛した人であることなどに気付き、父を受容する姿勢が見られた。また、回想療法終了時(入院8日目)には母への依存を反省し「将来は医療・福祉の仕事をしたい」と目標や独立心を述べた。

家族療法(家族内観療法、入院9日目):母来院し家族療法を行った。対面時互いに再会を喜び、笑顔で挨拶を交わした。A子は離婚による心的外傷、父への陰性感情、母への感謝の気持ちなどを述べた。一方母は自身の過保護だった養育、夫との離婚などについてA子に「ごめんね」と謝罪した。母子共に情動が見られ、家族間のスキンシップでは互いのコミュニケーションの重要性について再認識した。

当院からの登校(治療第2期、入院10日目~27日目):回想療法終了後、表情が明るくなり笑顔も見られた。登校への不安はあるものの「学校の勉強が楽しい、早く学校に行きたい」と話し、復学への意欲を認めた。入院16日目で、当院から登校した。久々の学校生活では、友人とのトラブルで泣いて帰院することもあったが、翌日はきちんと登校し、入院27日目に退院となった。

退院後の経過(治療第3期、退院後1日~1ヵ月):退院6日後の外来では「復学したが、留年したため周囲は年下。年下に敬語で話されないのは嫌な感じがする」と述べた。一方母から「また学校へ行くのが嫌になっている様子である」と相談があった。退院約2週間後、職員が母に電話した際「1日おきではあるが学校には通い、女子生徒と少しずつ会話ができるようになった」と述べた。その後も外来受診を継続したが、退院約1ヵ月後再度完全不登校となり再入院となった。現在再度3日間の回想療法を行ない、当院より登校を再開している。

考察:本例では、両親の離婚の原因について父を恨み、過度な母子密着による社会不適応が一因となり、不登校になったと考えられた。自己回想療法により、父への陰性感情が癒され、母子密着に対して反省し、日常生活や対人交流について客観的に捕らえる契機になった。また、家族療法により母自身も過度な母子密着を反省し、家族全体で考える必要性に気付いた。現在完全治癒までには至らず、今後も規則正しい生活、円滑な対人交流を習慣化するため、カウンセリングや日々の自己回想療法等で継続した登校を支援したい。